



一瞬でいいから世界が変わると思わせてくれ

■ 林 雄司



2000 年頃のデジタルカメラを買い集めています。

今のデジタルカメラはだいたい同じ形ですが、昔はレンズが回転するタイプや静止画に短い音声をつける謎機能など、さまざまなタイプがありました。

その珍しさもあって触っているといますぐ外に出てなにかを撮りたくなります。カメラがもたらす期待感は現行機種にも勝ります。

期待感、IT も本質はこれなんじゃないかと思えます。

「Clubhouse（クラブハウス）」、「Second Life（セカンドライフ）」、「Blockchain（ブロックチェーン）」、私たちが熱狂してきたものの中にはいま思えばなぜ？と思うものもあります。そのサービスが優れていたかどうかは分かりません。ただ、「世界を変えてくれる」という期待感を与えてくれたことは確かでした。

私は決して流行らなかったサービスを並べて冷笑したいわけではありません。むしろ歓迎する立場です。

IT の役割は夢を見させることだと思っています。

一瞬でもいいから世界が変わると思わせてほしい。

世界が変わるという大きな期待感もあれば、個人的な期待感もあります。

流行っているらしいから試すか、と思って始めたら明け方になっていた、あの体験です。

今のバイブコーディングと同じように、初めて CGI を書いたとき、「Pokémon GO（ポケモン GO）」のとき、時間が溶けるような感覚がありました。

これなら何時間でもできる、おれ天才なんじゃない？ そんな個人レベルの期待感を与えてくれるのも IT

■ 林 雄司
『デイリーポータルZ』編集長

1971 年東京生まれ。2002 年に『デイリーポータルZ』を創刊して以来ずっと編集長。インターネットが一番得意ですが「地味ハロウィン」などのイベント開催、書籍の執筆も行っています。好きなゲーム機は Dreamcast。



です（もしかしたら人によってはサッカーなどにもあったのかもしれませんが、私はそういう道を通らないまま大人になりました）。

いまミクロもマクロでも期待感をもたらしてくれるのは AI です。誤解を恐れずに言うならば、AI の中心も期待感です。最近、ついに近所の個人経営のスーパーの精肉売り場の POP が AI が描いたものになりました。微笑む肉牛の腹に霜降り模様がついていて不気味の谷どまんなかですが、世界が変わりつつあると感じました。

IT の本質は期待感と書きましたが、健康食品もビジネス書もすべて期待感です。自分を変えてくれるんじゃないかという期待を買っています。皮肉屋なのでどうしても皮肉っぽくなってしまいますが、我々には鼻先のニンジンが必要です。

世界にはいろんなニンジンが溢れていますが、テクノロジーこそ私にはいちばんのニンジンです。

ホモ・サピエンスが登場したとき、ネアンデルタール人やジャワ原人などいろんな人類がいたそうです。でも結局ホモ・サピエンスだけが残ってほかは滅びてしまった。

2000 年頃のデジタルカメラや Second Life、「Dreamcast（ドリームキャスト）」は滅びてしまった人類です。もしかしたら、という当時の期待感は今でも蘇ります。

今私が買おうとしている AI グラスも後世からしたら同じかもしれません。でも構いません。いまここで明るい未来を見せてくれる期待感こそ IT です。

2050 年頃の人に、25 年前の AI っていろいろありすぎるだろ、って笑ってもらおうじゃないですか。